

「神は罪をさばかれる」

(ローマ2:1-16)

一、すべて他人をさばく者

前回は1章18節から32節より、主の語りかけに耳を傾けました。1章28節に、「こつ語られています。《また、彼らは神を知ることには価値を認めなかったので、神は彼らに無価値な思いに引き渡されました。》(略)と。無価値な思いとは何でしょうか。1章29節以降で語られている、数々の良くない思いです。このようなつながりです。2章1節を見ますと、《すべて他人をさばく者》とは、《神を知ることには価値を認めなかったの》で《無価値な思いに引き渡され》た人たちである、ということになります。神を知ることには価値を認めなければ、人は他人をさばくようになります。

では、人はなぜ他人をさばくのでしょうか。神のかたちに似せて造られたからです。さばくことそのものが、悪いのではありません。神も罪をさばかれますし、私たちの罪に対するさばきを、御子イエス・キリストの上に下されました。私たちはだれをさばいたら良いのでしょうか。私たちに許されているのは、自分自身です。「きょうも神さまを悲しませることをやりました。神さま、申し訳ありません。ですが、私

の罪のために御子イエスさまが十字架で聖なる神からさばかれたことを感謝します」と申し上げたらよろしいです。

二、善を行う者、悪を行う者

神は私たち人間を、どのように見ておられるのでしょうか。テキストに聞くなり、「善を行う者」と「悪を行う者」です。善を行う者とはだれでしょうか。7節で語られています。《忍耐をもって善を行い、栄光と誉れと朽ちないものを求める者》です。忍耐とは、ただ単に耐え忍ぶという意味ではなく、たとえ希望が持てないような現実になんて置かれていても、主にゆだね、主に信頼して歩むことです。すなわち、救われた者の姿です。

では、悪を行う者とはどんな人でしょうか。8節で語られています。《利己的な思いから真理に従わず、不義に従う者には、怒りと憤りを下されます。》と。

《利己的な思い》とありますが、「利己的」とは「野心、党派心、利己主義」のことです。すなわち「生まれながらの人」「肉の人」の姿です。何でも反対してぶち壊そうとする人が、残念なことにおられますが、そういう人は、きょうのテキストに聞くなり「悪を行う人」です。もしも教会の中に分裂分派を起す人がいたら、その人を受け入れつつ、その方の主張に耳を傾けつつも、その人を動かしている霊と戦う必要が出てまい

ります。あるいは、その人を動かしている思想に対応して行く必要が出てまいります。

毎週、みことばであるキリストの福音に聞いているなら、そういう人が起きてくることはないと思える者です。

三、福音に接しなかった者は？

最後に、福音に接しなかった者はどうなるかについて、ご一緒に考えてみたいと思います。ひょっとすると、私共日本人のキリスト者にとっては、これが大きな関心事になっているかと思えます。主にあって、私の受け止め方を申し上げたいと思います。

キリストの贖いの死は、だれに適用されるのでしょうか。《キリストはすべての人のために死なれました。》(IIコリント5:15)とあります。一方で、《わたしのことを聞いて、わたしを遣わされた方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきにあつことがなく死からいのちに移っています。》(ヨハネ5:24)ともあります。そういうわけではっきりしているのは、キリストの福音を信じる人は救われていることです。また、福音に接していたにもかかわらず、信じているのかそうでないかがはっきりしていない場合は、神の領域です。

私たちが疑問に思うのは、福音に接することなく、亡くなった方々です。こ

れも神の領域ですが、そういう方々にキリストの贖いは適用されるのでしょうか。キリストがすべての人のために死なれた以上、適用されるとも言えますが、あまりはつきり言ってしまうと、伝道することの意味が薄れてしまします。このあたりは、「良い意味のグレイゾーン」「光り輝くグレイゾーン」と受け止めたらいかがでしょうか。

人を正しくさばくことのできる御方は、神だけです。14節をご覧ください。《律法を持たない異邦人が、生まれつきのままで律法の命じることを行う場合は、律法を持たなくても、彼ら自身が自分に対する律法なのです。》とあります。前回は申しましたが、各人の心には、「やって良いこと、悪いこと」が刻まれています。ですが、「やって良いこと、悪いこと」は、同じ国の人であっても、世代によって異なりますし、個人差も

あります。また百年前と現代ではかなり異なりますし、文化によってもかなり異なっています。ですから人の心にある「やって良いこと、悪いこと」は、はなはだバラツキがあると言えます。私たちは、主イエス・キリストによって、神が愛であり、正しい方であると信じていますので、神にゆだねる者です。軽はずみに、「あの人は滅びた」などと考えないほうが、主の御意思に

適っているとあります。以上は、私の受け止め方です。